

老年看護学実習における学内演習方法の教育効果

(その1) ルーブリック評価表の活用効果と演習方法における課題の明確化

木下 香織*・古城 幸子

新見公立大学看護学部

(2014年11月19日受理)

A大学の老年看護学の認知症高齢者グループホームでの臨地実習では、実習施設での学生受け入れの事情に配慮し、週1回学内演習を取り入れている。本稿は、学内演習でおこなっているルーブリック評価表を用いた振り返りの教育効果を明らかにすることが目的である。2013年後期から2014年度前期に老年看護学実習を履修した看護学部学生を対象に、質問紙調査と学内演習記録の分析を行なった。質問紙調査では〈ルーブリック演習による学びの深化〉〈ルーブリック評価表について〉〈ルーブリック演習の方法〉のいずれも高い評価を得た。学内演習記録の内容分析では、体験の意味づけ、学びの広がりや深まり、学びの共有などのカテゴリーに整理でき、演習方法の教育効果を確認できた。しかし、学生は実習体験の内省に困難を感じており、学生が評価表をより効果的に活用した振り返りができるような指導方法の検討が今後の課題である。

(キーワード) ルーブリック, 実習評価, 老年看護学

はじめに

A大学の老年看護学の臨地実習は、認知症高齢者グループホームで実習する『老年看護学実習』とサテライト・デイを企画・実施・評価する『生活支援看護学実習』の2つで構成している。そのうち、『老年看護学実習』では、実習施設での学生受け入れの事情に配慮し、週1回の学内演習を取り入れている。2ユニットに4名ずつの学生を配置し、毎日、各ユニットから1名ずつが交代で学内演習を行う。演習内容は、実習目標の達成度の振り返り、老年看護学に関連した研究論文の抄読および看護師国家試験の過去問題による学習である。

中央教育審議会の答申で、「学士力」を育むための教育方法の一つとして、学習の質を評価するパフォーマンス評価の活用が示されたことから、大学教育における活用の検討がされている¹⁾。ルーブリックとは、パフォーマンス課題によって学力をパフォーマンスへと可視化し、そのパフォーマンスを評価するための指針である²⁾。A大学では老年看護学の臨地実習について、看護学部1期生の臨地実習の開始にあたり、老年看護学実習、生活支援看護学実習ともにルーブリック評価表を導入し、それぞれの到達度や評価をおこなっている³⁾⁻⁴⁾。ルーブリックは、数値的な尺度とそれぞれの尺度に見られる認識や行為の質的特徴を示す形式で作成され、学習者に提示することで、学習の方向性を段階的に理解できるため、

自己学習能力の向上も期待できる。また、教員にとっては指導と評価の一体化を実現するものである⁵⁾。実習の貴重な一日を実習場から離れ学内演習とするうえで、学内演習が臨地での実習と乖離することなく、翌日の実習に活かされていく演習方法であることが望まれる。そこで、学内演習の一つに、学生が相互に実習体験を語り、聴き、ルーブリック評価指標を用いて振り返る演習を取り入れ、本稿はその教育効果を明らかにするものである。

I 研究目的

老年看護学実習で実施している、ルーブリック評価指標を用いて実習体験の振り返る学内演習（以下、「ルーブリック演習」とする）の教育効果を明らかにする。

II 研究方法

1. 対象

2013年後期から2014年度前期に老年看護学実習を履修した看護学部学生62名

2. 方法

1) 調査時期：2014年1月、7月

2) 調査方法：独自に作成した学生への質問紙調査と学内演習記録の分析を行った。質問紙調査は、2013年度後期に老年看護学実習を終了した32名には2014年1月

*連絡先：木下香織 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

に、2014年度前期に老年看護学実習を終了した32名には7月に調査紙を配布し、48名から回答が得られた(回収率77.4%)。学内演習記録は、2013年後期に実習した32名の学生が提出した64枚の記録を分析対象とした。

3) 調査内容：質問紙は〈ループリック演習による学びの深化〉9項目、〈ループリック評価表について〉4項目、〈ループリック演習の方法〉7項目を設定し、計20項目について4件法(4:とてもそう思う~1:まったく思わない)で回答を求めた。

4) 分析方法：質問紙調査は質問項目ごとに単純集計した。学内演習記録は、演習の評価に関する内容を1文1意味で抜きだし、記述内容の類似性にそって整理した。

5) 倫理的配慮：調査依頼の際に、研究の目的、自由意思による参加、記述内容や研究への協力の可否は成績には関係しないことを紙面と口頭で説明した。調査用紙は無記名とし、データは統計的に処理する。記入された調査用紙は、添付した封筒に入れ、封をして回収箱に入れるよう求めた。回答の提出により同意が得られたと判断することを説明した。学内演習記録の分析に協力が困難な場合はメールにて連絡を求めた。また、本研究は新見公立大学研究倫理委員会の承認を得た(2014年1月)。

III. 結果

1. 質問紙調査

表1に質問紙調査の結果を示した。全20項目の平均評価は3.46であった。

〈ループリック演習による学びの深化〉の平均評価は3.5、「3.高齢者の特徴への理解が深まった」(3.7)が最高で、「5.ループリックによって学びの視野が広がった」(3.6)、「1.実習で体験した事柄の意味づけができた」(3.5)など3項目が続いた。〈ループリック評価表について〉

表1 質問紙調査の結果 (n=48)

	質問項目	評価の平均
ループリック演習による学びの深化	1) 実習で体験した事柄の意味づけができた	3.5
	2) 認知症高齢者の言動の意味を理解することができた	3.5
	3) 高齢者の特徴への理解が深まった	3.7
	4) ループリックのレベルを考えることで、次への課題が明らかになった	3.4
	5) ループリックのスケールによって、学びの視野が広がった	3.6
	6) 老年看護学への関心が高まった	3.5
	7) 他の領域実習とのつながりが理解できた	3.4
	8) 自分自身の到達度が評価できた	3.4
	9) 自分自身の成長が実感できた	3.3
評価表について	10) 実習の目標が明確になった	3.5
	11) 実習の到達度が明確になった	3.5
	12) 評価表を用いることで学びの質が深まった	3.5
	13) 評価表を効果的に活用できた	3.3
	14) グループメンバーとの学びが共有できた	3.6
ループリック演習の方法	15) グループメンバーの発表を聞いて、自分の気付かなかった学びに気づくことができた	3.9
	16) グループメンバーの発表を聞いて、メンバーの新たな一面に気づくことができた	3.5
	17) 自分はループリック演習に積極的に参加できた	3.3
	18) 少人数での演習が効果的だった	3.3
	19) 実習体験を振り返るのにふさわしい間配を付けて行われた	3.4
	20) 教員の意見や助言が参考になった	3.7

表2 学内演習記録の内容分析の結果

カテゴリー(コード数)	コードの例
ループリックの活用(32)	前日実習で学んだことを基に、スケールとレベルを考えた
体験の意味づけ(27)	自分たちが何気なく体験していたこと、思っていたことも大切な学びであることに気づいた
学びの深まり(25)	エピソードは「こんなことがあった」で終わるのでなく、一つ一つ掘り下げることでこんなにも理解が深まるのだとわかった
課題の発見(19)	高齢者の行動の背景をあまり考えてなかったことに気づいたので、次回からは考えることができるようにしたい
ケアの方法の気づき(14)	外出支援で利用者に刺激を与え、季節感を感じてもらおうことで「生きている」という実感に少しはもつなげれば、と思った。
学びの広がり(12)	偏った方向からではなく、さまざまな視点で高齢者の学びを深めたい
学びの共有(11)	メンバーの学びや気づきを聞くと、私が気づかなかったことや、気づいていても違う視点から見ていて、学ぶところがあった
体験の意識化の困難さ(7)	さまざまな利用者や関わり、印象深かった場面や情報がどのようなことを意味しているか考えるのは難しいと感じた

て)の平均評価は3.4、「10.実習の目標が明確になった」「11.実習の到達度が明確になった」「12.評価表を用いることで学びの質が深まった」は3.5であった。〈ループリック演習の方法〉平均評価は3.5、「15.グループメンバーの発表を聞いて、自分の気付かなかった学びに気づくことができた」(3.9)が最高、で「20.教員の意見や助言が参考になった」(3.7)、「14.グループメンバーとの学びが共有できた」(3.6)と続いた。「9.自分自身の成長が実感できた」「13.評価表を効果的に活用できた」「17.自分はループリック演習に積極的に参加できた」「18.少人数での演習が効果的だった」は3.3で、今回の調査では比較的低い評価であった。

2. 学内演習記録の内容分析

表2に学内演習記録の内容分析の結果を示した。以下、文中ではカテゴリー名を《》，コードを〈〉で示す。

32名の学生が提出した64枚の学内演習記録から147のコードが抽出され、《ループリックの活用》《体験の意味づけ》《学びの深まり》《課題の発見》《ケアの方法の気づき》《学びの広がり》《学びの共有》《体験の意識化の困難さ》の8カテゴリーに分類できた。

《ループリックの活用》は32コードで、〈ループリックを活用しながら2日間の実習についての学びや目標の到達度を確認することができた〉〈昨日の学びをループリックにあてはめることで、学んだことを整理することができた〉〈体験を話し、ループリックにあてはめる作業をしてみて、そのあやふやだった部分を形にすることができた〉〈1つのエピソードで、たくさんのスケールやレベルに分けることができるとわかった〉などの記述があった。

《体験の意味づけ》は27コードで、〈自分たちが何気なく体験していたこと、思っていたことも大切な学びであることに気づいた〉〈学生に興味を示されることは他者への配慮をされていることだと知り、私たちに気を遣って下さる人生の先輩だと感じた〉〈同じ「聞く」という行動でも、いろいろな方法があり、相手に与える印象も異なるということだ〉などの記述があった。

《学びの深まり》は25コードで、〈エピソードは「こんなことがあった」で終わるのでなく、一つ一つ掘り下げることでこんなにも理解が深まるのだとわかった〉〈積極的な

気持ち、前向きな気持ちになることがADL低下を防ぐこともできるため、心理面は大切だと思った)〈グループホームで生活されている方々の年代は、戦争などによって、教育を受けたくても受けられなかったという時代的な背景があることを理解できた)などのコードであった。

《課題の発見》は19コードで、〈高齢者の行動の背景をあまり考えてなかったことに気づいたので、次回からは考えることができるようにしたい〉〈高齢者に「自分はボケている」などの不安感を与えないように心がけていきたいと感じた〉〈一人一人の疾患、それぞれへの関わり方についての個別性が、先週の1週間を通してようやく見えてきたので、今週はそれを意識して関わっていったらよいと思う)などであった。

《ケアの方法の気づき》は14コードで、〈外出支援で利用者に刺激を与え、季節感を感じてもらうことで「生きている」という実感に少しでもつながれば、と思った〉〈スロープや台を付け段差を解消しても、その環境に慣れなければならず、対象が生活する上で手を突く位置や足の踏み場などのくせに合わせた支援が重要であるとわかった〉〈認知症の高齢者は状況の変化に弱く、状況を把握しにくい人にはしっかりと声かけなどのコミュニケーションを行ない、状況把握をしてもらうことが必要だと思った)などであった。

《学びの広がり》は〈偏った方向からではなく、さまざまな視点で高齢者の学びを深めたい〉〈引き続き実習するなかでその関係性を理解し、個々の社会的な面やQOLを理解していきたい〉〈認知症高齢者へのイメージがこんなに広がっているとは今日まで気づかなかった)など12コードであった。

《学びの共有》は、〈メンバーの学びや気づきを聞くと、私が気づかなかったことや、気づいていても違う視点から見ていて、学ぶところがあった〉〈私が思っていたスケールの番号とメンバーが思っていたスケールの番号が違って、着眼点が違うことに面白さを感じた)など11コードであった。

《体験の意識化の困難さ》は、〈さまざまな利用者と関わり、印象深く残っていた場面や情報がどのようなことを意味しているか考えるのは難しいと感じた〉〈一つの状況においても感じたことは様々であり、その一つ一つをループリックにあてはめるのは難しかった)など7コードであった。

IV 考察

1. ループリック評価表の活用効果

質問紙調査による評価では、全20項目の平均評価は3.46、各項目は3.3~3.9の範囲にあり、全般的に高い評価を得た。学内演習記録の内容分析から分類できた8カテ

ゴリーは、質問紙調査の項目と一致するものも多く、演習方法の教育効果を確認できた。各カテゴリと質問紙評価の項目に照らしながら考察を進める。

《体験の意味づけ》は、「1.実習で体験した事柄の意味づけができた(3.5)」「2.認知症高齢者の言動の意味を理解することができた(3.5)」に関連するものである。《学びの深まり》は「3.高齢者の特徴への理解が深まった(3.7)」「12.評価表を用いることで学びの質が深まった(3.5)」に、《学びの広がり》は「5.ループリックのスケールによって、学びの視野が広がった(3.6)」に、《学びの共有》は「14.グループメンバーとの学びが共有できた(3.6)」「15.グループメンバーの発表を聞いて、自分の気付かなかった学びに気づくことができた(3.9)」に関連するもので、いずれも質問紙調査でも評価が高かった。学内で表現される実習体験の語りの内容は、実習場での実習指導者とのミーティングや実習記録の記述をふまえている。学内演習は、さらに、実習目標と有機的に関連づけていくことにより、実習上で見聞きした“体験”を“学び”へと意味づける過程といえる。老年看護学では、1年次の老年看護学概論を“知る”、2年次の老年看護学援助論を“わかる”、3年~4年次の老年看護学実習を“腑に落ちる”レベルへと到達する学習過程としてシラバスを組み立てている⁶⁾。パフォーマンス評価としてループリックは「知識の意味理解と洗練(わかる)」や「知識の有意味な使用と創造(使える)レベルの評価に適して」いる⁷⁾。本研究においてループリック評価表を活用する演習の意義が確認できた。

「6.老年看護学への関心が高まった(3.5)」ことも確認できた。

《課題の発見》は、「4.ループリックのレベルを考慮することで、次への課題が明らかになった」に関連するものであり、高齢者との関わりにおける自身の具体的な課題に気づくことやループリック評価表を用いることで課題と残されている目標を明確にできていた。評価の可視化によって、学生自身が段階的に学習の方向性を理解できるループリック評価表の有効性が確認できた⁸⁾。また、評価表を継続的に用いることで、学びの蓄積や未到達の目標を視覚的に確認できる点は、評価表導入時に確認された本評価表の有用性と一致した⁹⁾。《ケアの方法の気づき》では、個別のケア方法が高齢者にもたらす意味に気づくことができている。個々の高齢者への個別的なケア方法を見出す機会となっており、看護過程に代わる専門的な思考プロセスとなっている。

2. 今後の指導方法の課題

《ループリックの活用》に関連する項目として、〈ループリック評価表について〉で尋ねた「10.実習の目標が明確になった」「11.実習の到達度が明確になった」の2項目は3.5であるのに対し、「13.評価表を効果的に活用できた

(3.3)」、〈ループリック演習による学びの深化〉で尋ねた「8.自分自身の到達度が評価できた(3.4)」「9.自分自身の成長が実感できた(3.3)」は若干低い評価結果であった。ループリック評価表の存在が学生の到達度や目標の明確化に役立っている一方で、評価表の活用としての演習方法に課題が残ることが示唆される。

課題に関連するカテゴリーとして、《体験の意識化の困難さ》では、具体的な体験と実習目標とを関連させることの難しさが表現されていた。ループリック評価表の抽象化された表現が、具体的な場面と結びつくことで学生の理解が深まる場合や体験を結びつけるのに適当な語句が存在しない場合もある。ループリック評価表は、前年度の実習で使用した試行版に修正を加えて活用している¹⁰⁾。今後も、ループリック評価表の各スケール、各レベルの内容や順位性などの評価を継続して行く必要がある。

「17.自分はループリック演習に積極的に参加できた(3.3)」「18.少人数での演習が効果的だった(3.3)」という評価もあり、学生2~3名と教員という少人数の環境で、体験や想いを語ることへの苦手意識や精神的な負担感が影響することも考えられる。自由に語ることのできる場づくりも重要といえよう。「20.教員の意見や助言が参考になった(3.7)」は演習における教員の果たすべき役割の大きさを示している。学生の“体験”の語りにしっかりと耳を傾け、学生の気づきや迷いを“学び”へと意味づけていきたい。

謝辞

本研究への協力にご承諾いただいたA大学看護学部学生の皆さまに心から感謝申し上げます。

なお、本論文は日本老年看護学会第19回学術集会において発表した内容に加筆したものである。

文献

- 1) 中央教育審議会：「学士課程教育の構築に向けて」答申，2008.
- 2) 石川倫子：看護学教育におけるパフォーマンス評価，看護教育，55(8)，2014.
- 3) 古城幸子，木下香織：老年看護学実習の教育評価にループリック評価表を導入して，新見公立大学紀要，34，15-20，2013.
- 4) 栗本一美，木下香織，古城幸子他：生活支援看護学実習における学生の学習到達度，新見公立大学紀要，34，31-36，2013.
- 5) 前掲2)
- 6) 古城幸子，木下香織：「老年看護学」の授業展開と演習・実習の進め方，日総研研修資料，4，2013.
- 7) 石井英真：活用する力を評価するパフォーマンス評価，看護教育，55(8)，2014.
- 8) 前掲2)
- 9) 古城幸子，木下香織，栗本一美他：介護予防プログラム「サテライト・デイ」実習の学習評価—ループリック評価指標の活用を目指して，国際ナショナルNursing Care Research，12，125-132，2013.
- 10) 前掲3)